

# ICT を活用したグローバル人材育成プログラム

—人材育成という国際貢献—

Education Program Utilizing ICT

for Fostering Global Person:

Contribution to International Society through Human Resource

Development

北海道情報大学経営情報学部教授 穴田 有一

ANADA Yuichi

(Faculty of Business Administration and Information Science,

Hokkaido Information University)

キーワード：グローバル人材、ICT、海外留学

## 1. はじめに

大学の社会的役割は時代とともに変わってきた。現代の大学の起源といわれる12世紀から13世紀の初期の大学は、大学団、国民団、学部、学寮など一言では言えないくらい多様だったが、本質的には、商人、職人などの利益擁護集団と同様に、知識を学ぶものと教えるもの自主性を維持しようとするギルドであった<sup>1</sup>。これら初期の大学は、学生にとって全ヨーロッパに渡るボーダーレスなものだったが、時代とともに徐々に形を変えて増加し、ローマ教皇や国家との関係を深める過程を経て、今日の多くの国の大学が雛形の一つとするフンボルト理念<sup>2</sup>に基づく大学に移り変わってきた。このような大学の変容は、財政基盤の変遷が生み出した大学の社会的使命の変化と表裏一体をなすものであろう。

<sup>1</sup> 横尾壮英『大学の誕生と変容—ヨーロッパ大学史断章』東進堂、1999年

<sup>2</sup> 金子元久『大学の教育力—何を教え、学ぶか』筑摩書房、2007年

そして、今日また、大学はボーダーレスの時代を迎えようとしている。ECTS<sup>3</sup>に基づき学生流動化を行っている欧州に倣い、ASEAN10 各国も ACTS<sup>4</sup>に基づく学生流動化の時代に入ろうとしている。

大学の機能を突き詰めていけば、「知の伝達」と「知の発見」になるのではないだろうか。Professor の語源は profess、つまり人前でしゃべること、すなわち、「知の伝達」を行う人に他ならない。その根源は、紀元前から連綿と続く高等教育の基本的機能であるが、国家との関係を深めるにつれ、「知の発見」が大学の機能として著しく大きな意味を持つようになったと考えられる。今日、「知の発見」は大学の財政基盤にとって欠かせない機能になっているが、その役割は単なる財政上の必要性だけではないだろう。「知の発見」は二面性を持ち、知の地平を広げて人類の存在理由を宇宙の高みに押し上げる一方、リアルな幸福にも大いに貢献するものであり、大学の社会的役割として重要な機能になっている。近年、大学はその在り様が不安定になり、安定した姿を模索して揺れている。そのようなときには、ときどき原点に立ち戻り、社会的役割を再考するのがよいだろう。

日本は高度な技術や科学知識が社会システムの隅々に浸透した知識基盤社会へ移行しているといわれる。知識基盤社会の進展は、産業構造の急速な変化と社会構造の複雑化を生じるとともに、様々な国・地域が相互に依存しなければ成り立たないグローバル化を生じている。グローバル化とは、政治・経済・社会のあらゆる分野で「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場はもちろんのこと、社会の諸課題への対応も地球的規模で捉えなければならなくなった状況と理解されている<sup>5</sup>。このような変化の中で、我が国が科学技術に立脚した成長を目指すには、グローバル人材の育成が急務であり、高等教育機関の役割は、飛躍的に重要性を増している。この観点から見ると、国家の要請という側面では「知の伝達」と「知の発見」は表裏一体をなして機能し始めたと考えられる。

グローバル人材育成推進会議の審議まとめによると<sup>6</sup>、グローバル人材の概念には次の3要素が含まれるとされている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

<sup>3</sup> European Credit Transfer and Accumulation System (ECTS) Key Features : [http://ci.univ-lille1.fr/english\\_version/pdf/04\\_key\\_features\\_brochure\\_en.pdf](http://ci.univ-lille1.fr/english_version/pdf/04_key_features_brochure_en.pdf) (2016年2月14日参照)

<sup>4</sup> ASEAN Credit Transfer System (ACTS) : <http://www.aunsec.org/aunacts.php> (2016年2月14日参照)

<sup>5</sup> 首相官邸政策会議：教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について」(第三次提言)(平成25年5月28日) : [http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai3\\_1.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai3_1.pdf) (2016年2月14日参照)

<sup>6</sup> 首相官邸政策会議：グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)(平成24年6月4日) : <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2016年2月14日参照)

すなわち、グローバル人材とは、単に英語でコミュニケーションできるということではなく、自国の文化に根差したアイデンティティーをもち、チームワークに配慮しつつ積極的に課題に挑戦して、諦めずに結果を求め、予測不可能な諸問題に対して自分が進む方向を主体的に考えることができる人物像である<sup>7, 8</sup>。そして、グローバル人材は、その定義から考えると、知識基盤社会においては、海外で活躍する人材としてだけでなく、地域でも求められる人材となっている<sup>5</sup>。

すでに多くの大学が、このような観点からグローバル人材の育成を進めているが、海外へ留学する日本人学生数は、近隣諸国に比べて大きく落ち込んでいる<sup>6</sup>。情報技術者の養成を教育の主要な柱とする本学では、ICT (Information and Communication Technology) を活用した各種学内コンテストを含むグローバル人材育成プログラムを実施している。本学でも、学生が内向きであることは他大学と同様であるが、このプログラムにより多少ではあるが外向きに変わっている。このプログラムは、異文化を背景に持つ海外の学生との Web 作品やショートフィルム作品の共同制作、またはコンピュータプログラミングの共同作業を通して行う作品制作ワークショップ形式の相互訪問交流により、グローバル人材を育成するものである<sup>9, 10</sup>。実施方法としては、能動的学修 (アクティブ・ラーニング) を用いることにより、プログラム終了後も自ら海外へ飛び出す意識の定着を狙っている。本学の取り組みを紹介することで、日本人学生の海外志向を高める考察に多少でも寄与できれば幸いである。

## 2. 作品制作ワークショップ形式学生交流とアクティブラーニング

### 2.1 Web デザインコンテストによるアクティブラーニング

グローバル人材育成と並んで重要な教育改革のキーワードは、能動的学修 (アクティブ・ラーニング) <sup>11</sup> である。予測困難な時代にあって生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育成できず、能動的学修によって学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長することによって、実現できるとされている。一部の理系科目では、古くからグループでの実験実習が行われていたが、今日言われているアクティブ・ラーニングの意図を十分に意識した教育は、

<sup>7</sup> 独立行政法人 大学評価・学位授与機構：ASEAN+3 質保証フォーラム資料 (第2部「キャンパス・アジア」東アジアの学生交流状況) (平成25年10月1日)：

[http://www.niad.ac.jp/n\\_kenkyukai/1224452\\_1207.html](http://www.niad.ac.jp/n_kenkyukai/1224452_1207.html) (2016年2月14日参照)

<sup>8</sup> 日本学術振興会：大学の世界展開力強化事業：

[http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/h23\\_kekka\\_saitakua.html](http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/h23_kekka_saitakua.html) (2016年2月14日参照)

<sup>9</sup> 穴田 有一・広奥 暢・谷川 健・サイモン ソーラ・隼田 尚彦・齋藤 一・安田 光孝・川上 正博：Web デザインコンテストによる技術・文化の相互啓発で育つグローバル人材, 2014PC カンファレンス論文集, pp. 280-281, 2014

<sup>10</sup> 穴田有一：ICT を活用したグローバル人材育成プログラム (Web 作品制作, ショートフィルム制作, コンピュータプログラミング), グローバル人材育成教育研究, 第2巻1号, pp. 20-30, 2015

<sup>11</sup> 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (平成24年8月28日 答申)：

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2016年2月14日参照)

一般的ではなかったように思われる。本稿で取り上げる本学のプログラムは、現代的な形の「知の伝達」方法であるアクティブラーニングを取り入れながら改善を重ねてきた。以下では、その成立の経緯から説明する。

本学は、情報を核とする専門職業人養成に加え国際性と豊かな人間性を育む教育を目的とするが、2000年度から教員有志が、学内でWEBデザインコンテスト(WDC)を始めた。これが、本プログラムのルーツである。WDCは、大学の公式な教育プログラムではなく、教員有志のボランティア的な活動である。その趣旨は、授業時間以外に自主的な学修活動をするきっかけを与えることである。すなわち、学生がWeb作品の制作を通してコンピュータ技術とコンテンツ作成能力・表現力を磨くとともに、自主的な創作活動を課外活動として体験することで、授業においても主体的に学ぶ姿勢を身に付けることを意図している。WDCは他の学内コンテストと同様に、今でも課外の学修活動を促進する仕組みとして実施されている。

一方、2007年、本学はタイ王国のラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校(RMUTT)<sup>12</sup>と交流協定を締結した。交流協定に明記されている交流の範囲は、「学生の交流」、「教職員の交流」、「共同の研究教育活動の促進」の3つであるが、交流を実質化するために、学内に定着してきたWDCを基礎に、国際WEBデザインコンテスト(iWDC)による国際学生交流を始めた。略称のiはinternationalの頭文字である。iWDCは、交流協定の3つの範囲を網羅するものである。すなわち、この交流を実施するために、両大学教員の共同作業と実施内容の協議が行われる。iWDCは、まだ現在の相互交流プログラムの形にはなっていなかったが、それまで学内だけで行っていたWDCを発展させ、両大学間でWeb作品の学生コンテストを実施することにより、海外を舞台にした学生の自主的な学修活動を展開しようとするものである。

iWDCは次のように実施する。まず、本学とRMUTTがそれぞれの学生を対象として学内でWDCすなわちWEBデザインコンテストを実施し、優秀な作品数点を選ぶ。選ばれた作品のコンテンツは、それぞれ日本語あるいはタイ語で表現されているので、制作した学生はコンテンツを英語に直して両大学間の国際コンテストのエントリー作品とする。両大学の教員がこれらの作品をインターネット上で審査し、受賞作品を決める。この際に、教員も英語でコミュニケーションするので、教員の英語スキルトレーニングにもなっている。作品がエントリーされた本学の学生は、わずか2、3日の日程であったが、RMUTTを訪問し、iWDC授賞式に出席してRMUTTの学生と交流した。このプログラムは、日本私立学校振興・共済事業団の教育・学習方法等改善支援による支援を得て、2008年度と2009年度に実施したが、この資金が途絶えた2010年度は、インターネット審査だけのコンテストとなった。しかし、この一方の訪問による学生交流は、本学におけるグローバル人材育成の始まりであり、この後の相

<sup>12</sup> 本学が学生数約1,700人、3学部の小規模私立大学であるのに対し、RMUTTは学生数約26,000人の大規模国立大学である。

互交流に発展する。

## 2.2 作品制作ワークショップ形式学生交流

2011年度から開始された独立行政法人日本学生支援機構の留学生交流支援制度(SS&SV)<sup>13</sup>の支援が、iWDCが次のステップに飛躍する契機となった。たとえ2、3日の日程であっても学生が海外の大学を訪問し交流することの影響の大きさを知ったため、学生の移動を伴わないiWDCは、我々にとっては、非常に納得のいかないものであった。そのような状況に降ってわいたのが、SS&SVであった。海外との学生交流のための外部資金を探していた我々は、すぐに飛びつき、幸いにも申請が採択された。こうして、2011年度から、iWDCに続けてWeb作品を共同制作するワークショップを行う学生相互交流を開始することになった。このワークショップ形式学生交流は、次のような内容である。

このプログラムに学生が参加する条件は、事前のWDCで入賞することと、語学を含め一定の成績基準を満たすことである。ユニバーサル・アクセス<sup>14</sup>の段階に入った今日の大学生の学力は多様である。本学でも、リメディアル教育として中学校レベルからの補習を行わなければならない学生が在籍しており、それらの学生には、高校教育経験者による補習を行っている。しかし一方では、非常に学力の高い学生や、ICTに習熟し、それらの専門知識に秀でた学生も在籍している。このプログラムは、高い学力と高いICT活用力を備えた学生をグローバル人材として育成することを狙いとし、多様な学生の教育を充実しようとするものである。

このような条件を満たして参加する学生に対して、次の4つの目標を与えている。

- (1) 作品制作のICT活用力を向上させる。
- (2) グローバルコミュニケーション力を向上させる。
- (3) 両国の文化を互いに深く理解する。
- (4) 両国の学生相互の友情を育む。

このプログラムの本質をモデルによって明確にするとともに、他のICT分野への普及を図るために、4つの要素「選ぶ」「競う」「協調する」「共有・継承する」で特徴づけられるiWDCモデル<sup>9, 10</sup>を提唱している。図1はiWDCモデルの概要である。

以下はやや詳細な説明になるが、学生の意欲を高めるため試行錯誤を経てたどり着いた方法なので、あえて紙数を費やして説明する。本プログラムを図1のiWDCモデルにもとづいて説明すると、まず、各大学が学内で行うWEBデザインコンテストにより参加学生を「選ぶ」ところから始まる。コンテストは12月に募集を開始し、翌年の5月上旬が応募の締め切りである。両大学共通の審査基準に従い、各大学がそれぞれ作品審査を行い、受賞作品を決め、ワークショップに参加する学生を選抜する。選

<sup>13</sup> 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) : 留学生交流支援制度 (ショートステイ、ショートビジット : SS&SV) : [http://www.jasso.go.jp/about/information/press/1196718\\_3557.html](http://www.jasso.go.jp/about/information/press/1196718_3557.html) (2016年2月15日参照)。現在は「海外留学支援制度」に引き継がれている。

<sup>14</sup> マーチン・トロウ『高学歴社会の大学 - エリートからマスへー』東京大学出版会、1976年

抜かれた学生は、各大学で事前授業を受講する。事前授業の内容は各大学の判断で行うが、共通している内容は、相手国の文化や習慣と挨拶や数字程度の言語、英語指導や海外渡航指導などである。本学の事前授業は、6月から7月にかけて行われる。

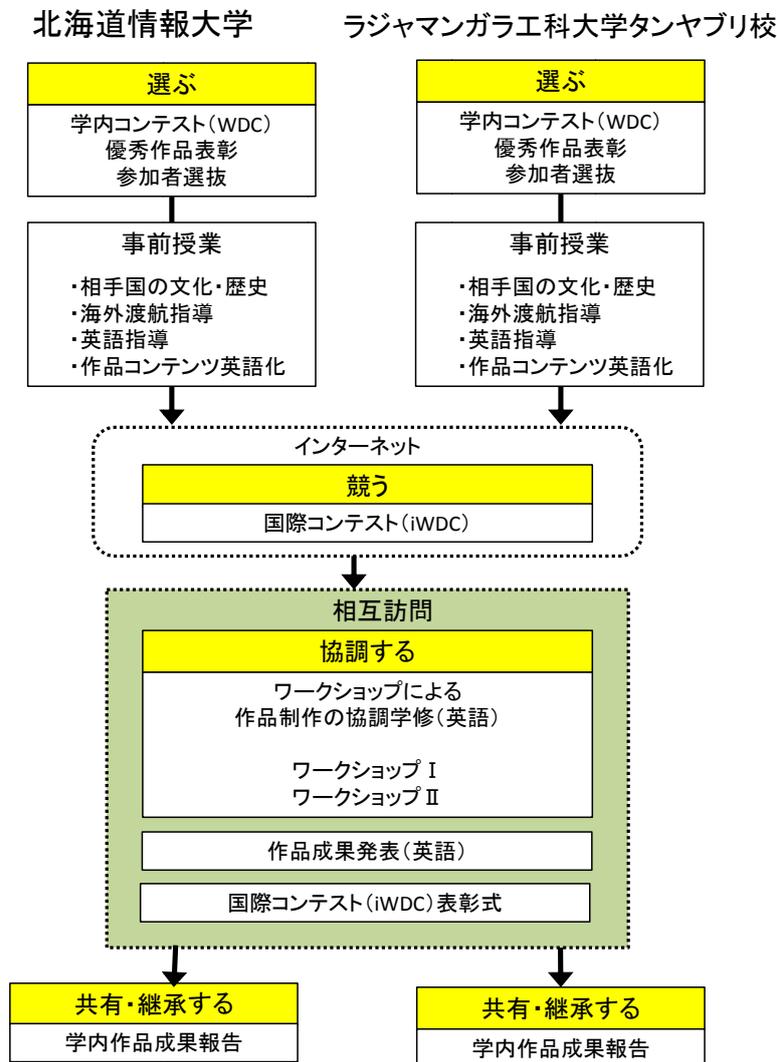


図1 iWDCモデル

事前授業では、WDCで入賞した作品のコンテンツ英語化の指導も行い、RMUTTと行うiWDCの応募作品とする。iWDCは、図1の「競う」場であり、本学学生とRMUTT学生が競うことで、作品制作のICT活用力の向上を図る。

事前授業を経て、学生は作品を共同制作するワークショップに参加する。2015年度のワークショップを例にすると、RMUTTで行うワークショップIと本学で行うワークショップIIの2つからなり、それぞれ8日間、合計16日間、例年通り8月から9月にかけて行われた。2つのワークショップの会場校の順番は、毎年交互に交替する。写真1、写真2は、ワークショップの様子である。

ワークショップは「協調する」場である。本学とRMUTTそれぞれ2名、合計4名からなるグループを作り、各グループ単位でWeb作品を共同制作する。作品の大きなテーマは「日本とタイの文化の比

較」であるが、各グループはさらに具体的なトピックを考えて作品を制作する。グループ内でのコミュニケーションは英語で行われるが、どちらの大学の学生にとっても英語は第二言語であるから、学生たちは大いに苦勞する。その苦勞の中で、外国人との実務的な英語コミュニケーション力と、異文化を背景とする者同士の協調性と友情が育まれる。



写真1 Web 作品共同制作 (2015 年度に実施した RMUTT でのワークショップ)



写真2 2015 年度ワークショップ最終日のグループ制作作品の発表会

ワークショップの主要な部分はグループ単位の協調学修であるが、ワークショップ I の始めには、オリエンテーションの他に、両大学のコーディネーターによる基調講演やユニフォームの授与が行われ、その後でグループを編成し、ワークショップの準備を終えてから、2つの授業が行われる。一つ目は、英語コミュニケーションの授業であり、英語を母国語とする本学の英語担当専任教員が担当した。この授業は、アイスブレイクも兼ねており、授業を進める中で両大学学生の緊張は徐々にほぐれてくる。二つ目は、グループワークの方法やタイム・マネジメントに関する授業であり、現役の Web デザイナーである日本人の本学専任教員により英語で行われる。また、グループ単位でキャンパス外での取材活動も行う。

ワークショップ最終日には、各グループが制作した作品のプレゼンテーションを英語で行う。

また、ワークショップ直前に実施した iWDC の表彰式も行われる。国際コンテストの入賞作品は、各大学の審査委員がインターネットによりルーブリック<sup>15</sup>で審査した点数の合計点によって決めるが、必要に応じてワークショップ期間に両大学の審査委員が参加して審査会議を行う。

### 2.3 授業科目「国際コラボレーション」への移行

本プログラムは、2013 年度から授業科目「国際コラボレーション」となった。ICT に関する主要な

<sup>15</sup> ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部、2014 年

授業科目を学修している3、4年生を主たる履修対象と想定しているが、全学年・全学部学科の学生が履修できるようにしている。全学年の履修科目としているのは、1、2年生にも少数ながら在籍している優れたICT活用力を持ち、学力の潜在力が高い学生に、早くから成長の機会を与えるためである。1、2年生の履修者には、「トビタテ留学！JAPAN」<sup>16</sup>など、さらなる国際交流や海外へのチャレンジを期待している。

この科目を修得した本学の学生には2単位が付与される。また、RMUTTでは、3単位を付与している。このように、単位付与があるために両大学教員による成績会議が行われ、各グループの作品だけでなく、各学生のワークショップ中の参加度や協調性などについて意見交換して成績を決める。

ワークショップ終了後は、各大学で、作品成果報告が行われる。本学では、2カ月程度の準備期間をおいて、11月に学内で報告会が行われる。これにより、iWDCモデルにある学修成果の「共有と継承」を図っている。学内コンテストの作品募集から学内報告会までを本プログラムの期間とすると、12月から翌年11月まで、1年間かけて行われるプログラムであるともいえる。

iWDCモデルによって本プログラムの本質を明確に概念化したことにより、他の学修分野の協調学修を本プログラムに取り入れる基盤ができたため、他の分野の学修を順次取り入れ、国際交流科目「国際コラボレーション」の履修機会をより多くの学部学科に広げ、できるだけ多くの意欲ある学生をグローバル人材として育成する段階へと進んでいった。

制作する作品の範囲が年を追って増えてきたのに伴い、一方では、参加する学生の合計数も、Web制作だけを行っていた2011年度の10人から18人に増加した。

### 3. 実施結果

#### 3. 1 教員の評価

両大学の学長をはじめ教職員は、本プログラムを高く評価している。その観点は、本プログラムが学生の主体的な学び<sup>9</sup>を培う上で効果的な学修方法であるという点である。また、互いに外国人である学生が協調学修することで、グローバル人材を育成する有効なプログラムであることが高く評価されているのである。RMUTTの学長であるDr. Prasert Pinpathomrat氏からも、「大学を卒業した後も、自主的に学習を継続する学生を教育する上で非常によいプログラムであり、今後も充実し継続したい」という評価をいただいている。また、ワークショップ最終日の成績会議では、目標の達成についても意見交換が行われ、個々の学生により差はあるものの、目標は達成されたと評価している。

#### 3. 2 学生アンケート

本プログラムの実施結果を学生の反応から評価するために、2013年度から学生へのアンケートを行

<sup>16</sup> 文部科学省：トビタテ留学！JAPAN：<http://www.tobitate.mext.go.jp/about/index.html>（2016年2月23日参照）

っている。2015年度のアンケートは、現在、分析中であるため、本稿では2014年度のアンケート結果について説明する。アンケートでは、ICT活用能力、英語コミュニケーション力および意識の変化について質問した。本学学生に対して、ワークショップに参加する前の2014年8月10日に事前アンケート、ワークショップ終了後の10月3日に事後アンケートを実施し、何れも参加した学生18人全員から回答を回収した。なお、以下の図で青棒は事前アンケート、赤棒は事後アンケートの回答である。

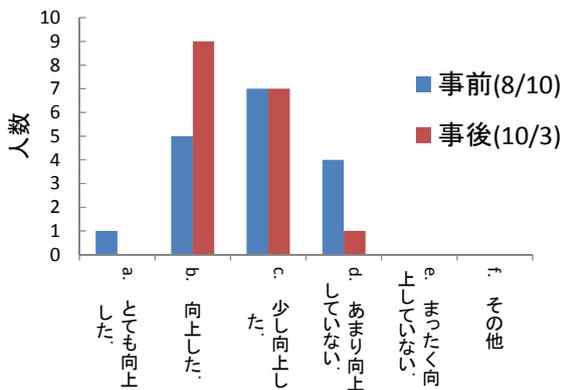


図1 作品制作に必要なICT活用力の向上

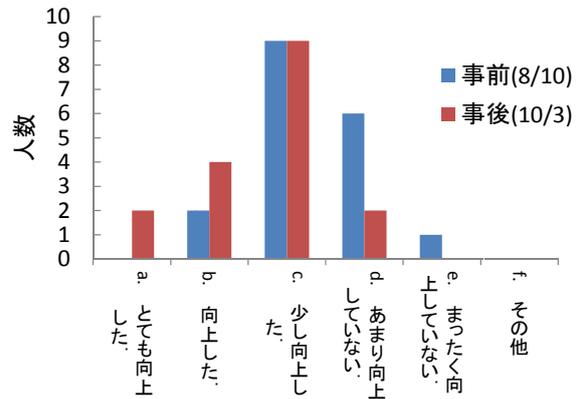


図2 英語コミュニケーション力の向上

図1は、作品制作ICT活用力の向上に関する質問である。これは、2.2節に示した本プログラムの4つの目標の内の1つ目に対する確認である。事前アンケートでは、「とても向上した」と回答した1名が他の回答に変わったが、「向上した」と回答した学生が約2倍に増加する一方、「あまり向上していない」と回答した学生は減少しており、ほとんどの学生が肯定的な回答をしている。

図2は、グローバルコミュニケーション力、すなわち、実際上は英語コミュニケーション力の向上に関する回答である。これは、2.2節に示した本プログラムの目標の内の2つ目に対する確認であるが、ワークショップ参加後は、肯定的な回答が増加している。あくまで学生が感じたことではあるが、本プログラムに参加することで、英語コミュニケーション力が向上したと考えられる。これは、事前授業からワークショップ最終日の英語プレゼンテーションまで、個々の学生を見てきた本プログラム担当教員全員の感想とも一致するが、ICT作品制作を題材とすることで、言語の障壁を適度に下げているのではないかと考えている。

本プログラムの目標の3つ目「両国の文化を互いに深く理解する」については、直接的ではないが「日本の良いところ悪いところを考えたことがあるか」と質問した。これに対する回答を図3に示す。肯定的な回答が増加しているが、もともと意識している学生が一定数参加していることもうかがえる。

なお、1節に述べたグローバル人材の3要素の内、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感に関連して、「将来外国人と一緒に働きたいか」と質問した。その回答を図4に示す。これについても、「ぜひ一緒に働きたい」と回答した学生が増加している。

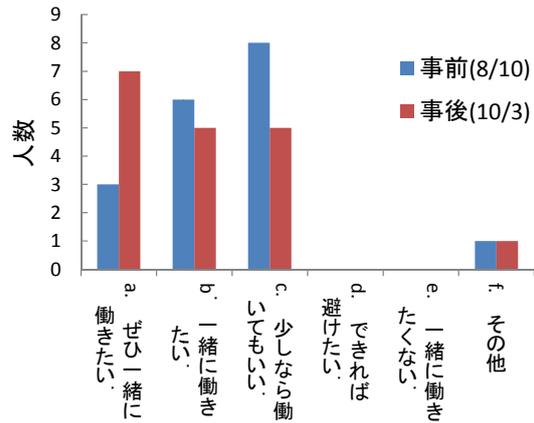
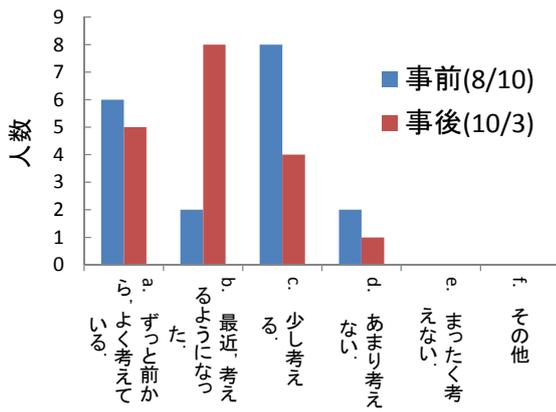


図3 日本の良いところ悪いところを考えたことがあるか 図4 将来外国人と一緒に働きたいか

本プログラムの4つ目の目標「両国の学生相互の友情を育む」については、ワークショップを指導した両大学の教職員から、成功したとの感想が異口同音に聞かれた。全てのワークショップが終了した後、相手大学の学生を空港まで見送りに行った学生たちが、いつまでも別れを惜しみ涙する光景は、毎年のことではあるが、同行した教職員の胸を熱くしている。学生たちは、プログラム終了後もSNS等で連絡を取り合っており、本学の参加学生の中には、タイで再会を果たしたものもいる。また、RMUTTでワークショップが行われるときには、過去に参加したRMUTTの学生が毎年本学学生のもとを訪れる。とくに、2014年度にRMUTTで行われたワークショップでは、第1回プログラムに参加したRMUTTの学生で、当大学の教員になった学生がワークショップを訪れ、今後はワークショップを指導する立場になりたいとの希望を語ってくれた。本プログラムは、本学とRMUTTが協力して作るグローバル人材育成スクールになりつつあると、筆者は感じている。

参加した学生の事前アンケートの自由記述では、学生たちが冷静かつ客観的にこのプログラムへの参加を受け止めている様子がうかがえるが、事後アンケートからは、喜びと感動が伝わってくる。紙数の都合があるので、自由記述の一部を以下に転載する。

[事前アンケート]

- ・特にありません。タイの方との交流は、コミュニケーションをとれるか不安ですが、これも良い機会なので楽しみにしています。
- ・とても良い経験になると思う。コンテストを通じて他国の生徒との交流が出来るのは、とても素晴らしい。
- ・もっと、プログラムの内容について細かく説明して欲しい。
- ・何をするのか、説明は受けたが具体的なイメージがまだ掴めてないのでその点では不安が残っています。

[事後アンケート]

- ・このコラボレーションに参加できて本当に良かったと思います!自分は英語が出来ないから技術が足

りてないから…とネガティブにとらえすぎていた自分の考えを改めることができました。

- ・多くの事を学びとても貴重な体験が出来ました。是非、もっと多くの人に参加してもらいたい。一方で、1回行った人はもう行けなくなるというのは、少し寂しいです。やる気の有る人が行くべきだと思うので、行けるような体制になるともっと良いと思います。

- ・色々な人と、コミュニケーションを取り、会話することによって、新たな楽しさを発見する良い機会になった。今後も、この活動を続けて欲しい。

- ・このような機会を与えられた場合、ぜひ一歩踏み込んでみるべきだと私は思う。貴重な経験とともに、自身の今後への選択肢を大きく広げることができるだろう。

- ・今回の国際交流は外国の学生と触れ合う事で互いに異文化を共有し、理解する事ができたと思います。今回この国際交流に参加できて本当に良かったです。

#### 4. まとめ

本稿で紹介した作品制作ワークショップ形式学生交流は、グローバル人材育成の手法にアクティブラーニングを用いたものである。これにより、ワークショップ終了後も自ら海外へ飛び出す学生たちが育ち、人材育成としての国際貢献になることを狙っている。この目的が達成できたかどうかの厳格な評価には、もう少し時間を必要とするが、アンケート結果を見る限り、今のところは期待通りに進んでいるように思われる。グループで行う協調学修において、学修の目標だけでなく、「友情を育む」という学生目線の目標を与えることで、海外への関心を低くしていると考えている。パートナーとの信頼関係を築きつつ共同作業で作品を完成するプロセスは、信頼関係と相互利益の両面を持つが、信頼関係の重要性を意識した人材育成を行い国際貢献につなげていきたい。

一方、本プログラムをより多くの人にするためには、両大学教職員の協力が不可欠であり、それによって、共同教育プログラムの開発も前進する。そのために、教職員も多大な努力をしているが、それは教職員に対してのグローバル人材育成にもなっている。本プログラムに参加したことで、国際交流に非常に熱心に取り組むようになった教職員も多い。教職員が学生とともに成長する一例であろう。

なお、このプログラムを実施するためには、多くの教職員の協力と、独立行政法人日本学生支援機構をはじめとする外部からの財政的支援が大きな支えになっている。これについては、本稿で詳しく説明する紙数がないので、すでに発表している文献<sup>9, 10</sup>を参照していただきたい。実は、支援体制を継続し維持発展させることは、本学だけでなく、相手大学にとっても非常に難しい課題である。教職員が単なる仕事として係わるだけでは、このプログラムは成功しない。活動資金の問題はもちろんのこと、参加教職員にプログラムの趣旨と国際貢献としての価値を理解していただくことが不可欠である。これらの問題を日常的に解決する努力の延長上に本プログラムの充実と継続がある。